

桜山日光館

大正時代に、当代の左甚五郎とも言われた長谷川喜十郎をはじめ三十三人の技術者たちによって、十五年間の歳月をかけて製作された日光東照宮模型は、実物の十分の一で、陽明門をはじめ、本殿、拝殿、五重塔など二十八の建物と、鳥居などの附属物をすべて再現しています。

構造はもちろん、装飾や、彫刻、絵画にいたるまで、実物に忠実に再現され、その部品は総数五十万個といわれています。

この日光東照宮超精巧模型は、戦後アメリカに渡り、長い間アメリカ全土を巡回公開されるなどした後、再び日本に里帰りしました。

当高山屋台会館では、高山城主金森氏をはじめ、代々の郡代、代官と、徳川家ならびに日光東照宮との深い縁と、名工左甚五郎出生の地と、言い伝えられる飛騨高山の地に、日光東照宮超精巧模型が永く保存展示されるために、高山屋台会館附設“桜山日光館”を開館いたしました。館内は、近代的な中にも荘厳な雰囲気を持たせ、居ながらにして日光東照宮に在る思いに皆様を誘うとともに、日光東照宮と飛騨高山、桜山八幡宮との脈々とつづく因縁を知っていただけます。



陽明門



博物館相当施設
国指定重要有形民俗文化財

高山祭屋台会館

飛騨高山
桜山八幡宮

高山市桜町178番地

TEL (0577) 32-5100(代) FAX (0577) 32-0339

<http://www.hida-hachiman.org/>

№ 032402

桜山八幡宮 高山祭屋台会館
桜山日光館



高山市桜町178番地 TEL<0577>32-5100 FAX<0577>32-5166

夜まつり



高山祭行列

桜山八幡宮

祭神 八幡大神(応神天皇)
熱田大神(日本武命)
香椎大神(仲哀天皇, 神功皇后)

桜山八幡境内



屋台会館



只今お撮りしましたお写真はご購入自由のお写真です
出口にて仕上がりっておりますのでお立ち寄りください

高山祭 屋台会館 へようこそ!

飛騨の匠の技あつめて 高山祭の屋台

古くから飛騨の国は、大和朝廷へ、税のかわりに匠(たくみ)を毎年送り出しました。選ばれ

て都へ出た匠たち(毎年100人~150人)は、奈良の都の宮殿や、お寺の建築に従事してその腕をふるいました。

匠が都へ送られた期間はおよそ600年、延べにして7、8万人の飛騨人が一年間都で働いたことになります。この人たちを総じて「飛騨の匠」と呼んでいます。

飛騨の国には、今もこの匠たちの永い伝統と、培われた技術が脈々と受けつがれていますが、中でも江戸時代後期に、大輪の牡丹のように花開いたのが高山祭の屋台です。

茶人殿様金森氏の城下町として栄えた高山は、元禄五年(1692)に幕府の直轄地「天領」となると、それまでの上方好みの文化に加えて、江戸の文化が波のごとく入り込んで来てこの山深い飛騨の地で見事にミックスされて栄えました。高山の町人たちは町内毎に屋台を造って、春秋の祭に心意気を競いました。

高山祭の屋台の特徴は、均衡の取れた優雅な外形と、すみずみにまで行きわたった細かな気配りで、木工・塗り・彫刻・金具・織り・染め・絵画・人形にと望み得る最高のかたちをつくり出そうとしたところにあります。こうした職人芸の絆を、統合しながらプロデュースして、一台の屋台というものに仕立て上げた旦那衆の美意識と、それを



かぐらたい
神楽台

飛騨国主金森重頼の実弟重勝より宝永5年大太鼓の寄進を受け、欄干付の車に大太鼓を載せ、祭礼に巡行したのが起源で、現在も屋台行列の先頭に立ち、大太鼓2人、締太鼓1人、笛2人が祭囃子を流しながら曳いている。



ほていたい
布袋台

享保年間の創建とされ、布袋の操り人形を主題にしてこの屋台が建造された。布袋和尚と唐子2体は、操り手綱36条と9人の綱方を要する極めて複雑巧みな、からくり人形で、離れからくり人形中日本最高のものである。



きんぼうたい
金鳳台

享保3年の創建といわれているが、その後破損し、文政元年に出来たのが現在の屋台で、神功皇后に武内宿禰の像を飾っている。
金鳳台は、文政年間の屋台の形を崩さず、高山の屋台の基本の形をなしている。



だいはちたい
大八台

高山で最初の三輪の屋台で、御所車の直径は1.58mもある。中段は平安調風の御殿造りで、囲いがなく簾を半ば垂らし、この御殿で鳥帽子、直衣の装束をきた童子達が優雅な屋台囃子の大八曲を昔は演じていた。



きゅうほうしゃ
鳩峯車

創建は延享4年で、その後天保8年に再建されたのが今の屋台であり、特に中段の前面には雲龍、側面には明人遊苑図の刻糸幕、後面見送りは綴錦のササン朝モードの樹下仙人美人図の垂幕は稀品中の稀品である。



じんまたい
神馬台

創建年代は享保3年以前で明和6年の再建、天明元年に新調した、神馬と白丁2人の飾り人形を備えている。
中段の紫鱗紋織出しの大幕に左右側面に2個づつ後面に1個の般若面を大きく刺繍しているのが印象的である。

大切に守り伝えて来た町人の情熱で、現在も眼前に屋台を見ることが出来るのです。

しかし、現在23台残るこれらの高山祭屋台も年に一度の祭礼日にしか曳き出されませんでしたので、何とか遠来の方々に一年を通して屋台を目にしていだきたいという念願から「高山祭屋台会館」を建設し、4台ずつ交代で公開して、「さすが飛騨の匠の技と心」と賞賛をいただいています。

文化財保護のため照明の照度を落としておりますのでご了承ください。

高山祭のみどころ 国指定重要無形民俗文化財

高山祭は、ながい雪国のくらしから解放され花開く春祭（4月14・15日）と、取り入れを終えて、満山紅葉に彩られる秋祭（10月9・10日）の二度行われます。

神社では、古式にのっとった祭事のあと、氏子中の供奉による祭行列が町にくり出します。カンカコカンと呼ばれる鶏闘楽、大太神楽や雅楽などの奏せられる中を、神旗、台名旗、神輿が、一文字笠に袴姿の警固をしたがえて長い列を作り、獅子舞は戸毎に訪れて氏子一同の弥栄を祈ります。

一方、各町内の屋台蔵から曳き出された屋台は、神社境内などに曳き揃えられ、精巧で奇抜なアイディアのからくり人形の奉納があり、夕方ともなると各屋台は棟から勾欄へと飾られたたくさん



の提灯に明かりを入れて「高い山からノーエ、谷底見れば」と、ゆったりした曳き別れ歌をうたいつつ夜祭は最高潮に達します。



せんになたい
仙人台

高山の屋台中ただ一台の屋根が唐破風で、古い台形を残している貴重な屋台である。昔「衆の仙人と美女」の操り人形があったが、風紀上よくないという代官の差し止めにより、現在は祭神として仙人像が飾られている。



ほうじゅうたい
宝珠台

創建年代不詳、文政11年大改修で、棟飾りに雌雄の大亀を載せた。この大亀は屋根を軽くするため和紙に漆をかけた一閑張りで出来ている。この屋台の台輪は、ケヤキ材の一枚板で高山の屋台の内が一番美しい。



ぎょうじんたい
行神台

創建年代は享保3年以前と言われており最古の一つ。明治9年の大火で一部焼失し、明治16年に再興、神社建築の様式を取りいれている。この地域を開いた行者の徳を慕い祭神として、役の行者が飾られている。



ほうめいたい
豊明台

創建年代は不詳、明治33年から3ヶ年かかって大改修を行い、飛騨の匠の大工、彫師、金具師、塗師などの技術を集めた装飾をほどこしている。屋台芸術の粋をあつめた絢爛豪華な屋台である。



ほうおうたい
鳳凰台

創建年代は不詳、嘉永7年に378両をかけ大修理を行っている、その後、明治43年に再度大修理が行われ、総坪3万坪という金具と、7尺の樺の大材で彫られた谷越え獅子の波渡りは、高山の屋台最大のものである。



みこじ

文政年間に創造された前神輿が、明治8年に大火のため焼失して、明治21年から5ヶ年かかって創造した。八角形の雄大な形態と壮麗な美しさを誇り優美な装飾は、日本一と称され、重さ約2トン半の大神輿である。